

形に込められた願い

鳥取県 正明寺 住職 白澤和敬

九十六歳で亡くなった女性の、お葬式のできごとです。この辺りでは、今でも昔ながらの風習で、地元の方々がお葬式のお世話をされます。

その日も、ご遺族や地元の方々が多様なお弔いの道具を持ち、お家からお墓まで三十人程の長い行列を組んで行きました。お墓に着くと、塔婆などとともに、地元の方々で作られたお花台やお水台をお供えします。

その地域には、若い頃に大工の経験がある福井さんという方がおられ、率先してお弔いの道具を作られます。この度のお道具も中々に見事な出来栄で、普段はあまり作られることのない線香立ても、竹でしつらえてありました。

そしてふと見ると、お花の横に、金の輪がついた竹の杖が立てかけ

てあります。私はこれまでのお葬式では見かけない道具だと思いついて、「今日は杖がありますね」と聞いてみました。福井さんは照れくさそうに、「年をとられた方が遠いところまで旅をされるのに、杖があれば助かるなと思って」と話されました。

私は「極楽浄土への杖であったか…」と、福井さんの優しさに深い感銘を受けながら、お墓でのお経を読ませて頂きました。

(平成二十八年二月放送)